

# ゲゲゲの鬼太郎とユング心理学

佐藤 義隆

文化創造学部文化創造学科

(2007年11月7日受理)

## GEGEGENO KITARO AND JUNG PSYCHOLOGY

Development of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,  
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

SATO Yoshitaka

(Received November 7, 2007)

はじめに

昨年、畠中恵の「しゃばけ」がテレビ放映されました。漢字で書くと「娑婆気」と書き、俗世間の名誉や様々な欲望が離れない心のことで、「つくも神」になりそこなった墨壺が、どうしても「つくも神」になりたい一心で次々とおこす殺人事件を、あやかし(妖怪)と人間の間に生まれた一太郎という回船問屋の跡取息子が解決する話で、江戸時代にはこうした妖怪物が人気がありました。

明治時代には、コックリさんが大流行しました。コックリさんの起源は19世紀中ごろのアメリカのテーブル・ターニングという降霊術ですが、明治時代は、無批判に欧米化した時代で、その流れの中にコックリさんの流行もありました。明治時代の妖怪ハンターといわれた井上円了は、コックリさんの原理解明に挑み、コックリさんは、予期意向と不覚筋動によるものと科学的に説明することに成功しました。予期意向とは、潜在意識が呼びおこされて、自動的に生じる行動であり、不覚筋動とは、無意識に動かしてしまう筋肉運動のことであり、これは現代医学からみても合

理的説明になっているということです。井上円了は、迷信や俗信による不思議な現象を「妖怪」と呼び、妖怪は全て科学の原理で説明かせるとして、全国を講演してまわりました。コックリさん以外にも、山上の大入道はブロッケン現象であるとか、火の玉は天然ガスが野火で発火して、風で飛び回るとか、400種の妖怪退治をして、生涯科学的啓蒙活動に努めました。

井上円了は「妖怪」を3つに分類しています。

1. 虚怪：実際にはありえない俗信・迷信(ろくろ首、雪女等)
2. 実怪：科学的に説明できる不思議な現象(コックリさん、ブロッケン現象、火の玉等)
3. 真怪：実怪の中の、科学的に説明しきれない真の謎

「ゲゲゲの鬼太郎」の世界は、井上円了の分類でいうと「虚怪」にあたると思いますが、私は「ゲゲゲの鬼太郎」の世界を、新しい視点で見てみることを思いつきました。

「ゲゲゲの鬼太郎とユング心理学」というタイトルは、「ゲゲゲの鬼太郎をユング心理学の視点で読み解いてみる」という意味でつ

けました。「ユング心理学」の一貫したテーマは、無意識の中にあるもう一人の自分の存在を認め、それを意識の中に統合していこうというものです。鬼太郎にとって、もう一人の自分とは誰なのか？本論文のメインテーマはこのことを考えてみることで、手順として、鬼太郎の世界とユング心理学の世界を概観した上で、本題に入っていこうと思います。

## 1 ゲゲゲの鬼太郎の世界

### 1. 妖怪について

「妖怪はいるのかいないのか」は難しい問題で、神でない不完全な人間には、いるともいないとも答えることはできないと思いますが、どうして誕生したのかについては考察することができます。

2000年に「大妖怪展」が福岡、神戸、京都、岐阜で開催されました。私は岐阜で開催されたときに見に行ってきました。そこでわかったことは、「妖怪」とは人間が抱える苦しみや不安、そして畏怖の心が生み出したものだという事です。

鎌倉時代の地獄絵には、冥界で人間を懲らしめる恐ろしい鬼が登場し、室町時代の絵巻物には、傘や草履、楽器等、捨てられた古い器物が人間に復讐するために妖怪になる話が描かれています。江戸時代になると、怪談が町民文化として広く一般社会に浸透し、浮世絵や浄瑠璃等に妖怪や幽霊が盛んに取り上げられ、絢爛たる妖怪文化が花開きました。

民俗学用語に「共同幻想」という言葉がありますが、妖怪は共同幻想の1つともいえます。大脳が発達して想像力を獲得した人間は、人間存在をはるかに超えたものが統御・支配している世界の存在を想像しました。更に、その想像を具象化し、現実社会に想像世界を投影した世界を構築してきました。それが民

俗社会に定着した世界像です。そして、あらゆるものにそのような世界像が反映され、万物に宿る霊魂、精霊に視覚的な姿が付与されるようになりました。自然現象、神や精霊、妖精、悪魔、妖怪等を擬人化することで、人類は豊かな「心象風景」を構築し続けてきました。国立民族博物館教授の近藤雅樹氏は、「大妖怪展」の『図録』の中で、そうした「心象風景」は快適な「空想の繭」であるという表現をしておられます。その繭の中に、現実世界を丸ごと包み込んでいるというわけです。神や霊魂、妖怪等の存在を想定して構築された民俗社会の「世界像」は、一種の共同幻想ですが、そのお陰で、人々は豊かな心を獲得しました。また、同じ『図録』の中で、この展覧会の主催者は、「科学の進歩によって得た合理的な知識や物質的な豊かさにストレスを感じている現代の私達にとって、異世界の扉をくぐり、日本人の心の奥底にある恐れと憧れから生まれた妖怪と触れ合うことは、きっと忘れかけていた「心の豊かさ」をもたらしてくれるでしょう」と挨拶されています。

こうしたことを踏まえて、水木しげる氏の妖怪観をみておきましょう。水木氏は、『妖怪なんでも百科』の中の質問コーナーで、「妖怪はどのようにして生まれてきたのでしょうか？」という質問に、次のように答えておられます。

妖怪は自然に生まれたものではなく、人間が持つ恐怖心や恨み、憧れの心が創ったものと考えられています。その心とは、大きく次の5つに分けることができます。

1. 自然がおこす地震や洪水、津波、火山の噴火など、人間とは比べようもない凄じ力は、妖怪の仕業と信じた。
2. 病気になることや貧しくなること、死ぬことへの恐怖心が、それらの原因を、恐ろしい妖怪のせいにしたもの。

3. 動物やある種の生き物など、自分を襲ってきそうなものに対してもつ恐怖心が、動物を妖怪へ変えていったもの。
  4. 死ぬことに対して恐れを抱き、それが永遠の生命に対する憧れへとかわり、長い寿命をもつ植物には、そんな羨ましさから特別なものだと考えて、妖怪にみたてた。
  5. 迷信やうわさなどを、そのまま信じてしまい、ほんとうのことだと思ってしまった心が想像して創りあげたもの。
- 以上のように、妖怪の存在は、恐れや憧れや希望が生んだものなのです、と水木氏は結んでいます。

## 2. 水木しげる氏とゲゲゲの鬼太郎

地球の先住民幽霊族の最後の生き残り鬼太郎が悪い妖怪をやっつける物語は、妖しく、不思議な魅力を放っています。作家の京極夏彦氏は、鬼太郎が他のヒーローと違うところは、古びないところで、その秘密は日本人にしみこんでいる情念とか文化を踏まえているところにあると捉えています。

その鬼太郎の生みの親水木しげる氏は、大正11年(1922年)3月8日、武良亮一、琴江夫婦の次男として、父が働いていた大阪で生まれました。生後1カ月で母とともに鳥取県境港市へ帰郷します。5歳のとき、武良家のお手伝い景山ふさ(のんのんばあ)に可愛がられ、妖怪の話や伝説を聞いて育ちます。また、のんのんばあに正福寺へ連れていってもらい、地獄極楽絵を見せてもらったりして、不思議なものへの関心を持ち、別の世界の存在というものを知るようになります。水木氏の人生を決定したのは、こののんのんばあとの出会いでした。彼女から聞いた妖怪の話や正福寺で見た絵の衝撃が、後に妖怪の世界探究につながっていきます。彼女に教えてもらったことは、『のんのんばあとオレ』に詳

しく書いてあります。7歳の時、境尋常小学校に入学しますが、自分のことを「しげる」といえずに「ゲゲ」となまっていたので、「ゲゲ」とあだなされるようになります。後に、『墓場の鬼太郎』が『ゲゲゲの鬼太郎』に変わるの、この7歳の時のあだなをもとにしています。

のんのんばあや妖怪と過ごした夢のような少年時代のあとには厳しい現実が待っていました。世間からちょっとずれているところのあった水木氏はどこへ行っても長続きせず、小学校卒業後職を転々とします。昭和19年にはラバウルへ送られ、日本陸軍の陰湿ないじめを体験します。ラバウルでは爆撃を受け、左腕を失いますが、収穫もありました。トペト口達トーライ族の人々との出会いです。彼らは温かく、愛嬌があって、心豊かな人達でした。そして、彼らの祭りで見たワニや鳥の仮面をかぶって踊る姿からふるさとの妖怪を思い出し、後に鬼太郎を創造するとき、トペト口達をモデルにして造形していくことになります。

戦後、ひよんなことからアパート経営をしていた時期があり、そこは神戸市兵庫区水木通りにあったので、「水木荘」という名前にしました。「水木しげる」のペンネームは、ここに由来します。住人の一人に紙芝居画家がいて、その人から紙芝居技術を教わり、紙芝居描きが始まります。紙芝居仲間から、かつて東京で伊藤正美原作の「ハカバキタロー」という因果物が流行したことを聞き、ここから鬼太郎を手がけていくことが始まります。昭和29年、32歳の時でした。そして、昭和43年、46歳の時に、『ゲゲゲの鬼太郎』のアニメ版が放映され、妖怪ブームが巻き起こり、2007年には5度目のテレビアニメの放映がありました。

### 3. 「妖花の森のがしゃどくろ」

私は以前、「ゲゲゲの鬼太郎と文学」という論文を書いたことがあります。それは、「妖花の森のがしゃどくろ」という『ゲゲゲの鬼太郎』の一作をもとに、その作品の中に含まれる文学的テーマを取り上げて論じたものです。『ゲゲゲの鬼太郎』理解の一助として、もう一度簡単にまとめて書いておこうと思います。

『ゲゲゲの鬼太郎』にはよく戦時中の南洋のことがでてくることがあるが、それは水木しげる氏の戦争体験と関わっているということ。

「桜」モチーフへの言及がなされていること。

水木氏は、目玉の親父に、梶井基次郎の「桜の木の下には」の文を引用させることによって、桜をはじめとする樹木の妖力に目を向けさせています。古代から現代に至るまでの文学者が「桜」モチーフに拘るのは、日本人に浸透しているアニミズムのせいだと指摘したのは佐伯彰一氏です。アニミズムとは、ラテン語の「氣息」とか「靈魂」を意味するアニマ(anima)に由来する語で、様々な霊的存在(spiritual beings)への信仰のことです。霊的存在とは、神霊、精霊、靈魂、生霊、死霊、祖霊、妖精、妖怪等のことです。妖怪はアニミズムの霊的存在の一つであり、文学の一つの大きな要素であることがわかります。水木氏は、こうした日本の文学的伝統をさりげなく使うことによって、氏の妖怪の世界を深いものにしています。

「能」のモチーフがプロットになっている。

「能」のモチーフ、つまり死後の世界からの語りかけが物語の骨格になっています。妖花に導かれて南の島へやってきた花子は、そこでおじの亡霊に会います。成仏できない霊

がでてきて無念を語るのは「能」の世界の特徴です。埋葬されずに死んだおじが、きちんと埋葬されることを願って亡霊となって現れたことがわかり、花子と鬼太郎たちはおじの遺骨をきちんと埋葬し、墓守をがしゃどくろに任せて帰国します。

「夢」モチーフが使われている

花子と戦争で死んだおじとの出会いは、花子が妖花の咲く木の下に立つ夢を見ることから始まりました。夢は昔は神のお告げとか、悪魔のお告げと解釈されていました。つまり、夢とは外からやってくるものとして考えていたのです。『聖書』でも、神の意志が預言者の夢の中で伝えられますし、ギリシャ神話でも、夢の神オネイロスが送るものとされていました。日本でも神々の夢のお告げを得るために夢殿にこもりました。また、寺にこもって仏様に会う努力もしました。有名なのが長谷寺の「わらしべ長者」の夢です。ところが、近代になると、フロイトやユングなど、夢はその人の深層心理、つまり人間の内側からやってくるという考え方が一般的になりました。花子の夢にはこの両方の解釈が融合した形の夢として描かれています。花子は夢を見ているときにうなされます。夢でうなされるのは、近代的な夢の解釈では、心にわだかまりがあるためとされています。「わだかまり」とは「心の中でつかえている感情」のことです。花子は心優しく、父から聞いていたおじのことを折りに触れては思い出し、心を痛めていたと思われます。彼女には、おじが外側から送った超自然的メッセージを受け入れる感情が内側にあったことを示しています。

### 4. 水木しげる氏の基本姿勢 科学万能への警告

水木氏は、一切の問題は科学によって解決

しうという科学万能主義に警告を発しています。科学万能主義の欠点は、精神面を軽視しがちになるということです。世界には、目に見えない世界、耳に聞こえない世界があります。妖怪のことを考えるということは、目に見えない世界に目を向け、耳に聞こえない世界に耳を傾けることだという基本姿勢を水木氏は貫いておられます。この基本姿勢を示すかのように、1996年に出た『ゲゲゲの鬼太郎』完全復刻版全九巻の中の第一巻の最初に載っているのが「大怪獣」です。

ニューギニアで三億年前のくじらの祖先の大怪獣が発見され、天才科学者山田秀一が調査に行くことになります。山田の妹啓子が彼にお守りを渡そうとしますが、そうした非科学的なものはバカにして受け取りません。同行する鬼太郎が預かります。鬼太郎は心が優しいと思う啓子。この調査の目的は、大怪獣の血を採血してもちかえり、不老不死の謎を解くこと。この名誉を独り占めするため、鬼太郎に大怪獣の血を射ち、一人日本へ逃げ帰った山田。大怪獣になった鬼太郎が日本へ帰ってくると山田は大怪獣のロボットを作り、鬼太郎を攻撃します。自分が預けたお守りを大怪獣が投げたので、啓子は大怪獣が鬼太郎であることに気づき、全てを察した啓子は、名声だけが全てではないと兄を諭します。いい大学を出て、勲章をもらう人間が一番と考えていた山田は、母と妹に諭され、科学の知識を自分の利益だけのために使おうとしたことは間違っていたことに気づき、鬼太郎を救い、鬼太郎に詫言います。科学的思考が増すと精神性や人間性が薄れがちになるきらいがあり、山田もそれにとりつかれていたわけですが、母や妹の兄を思う気持ちによって目覚め、人間性を取り戻すことができました。

明治時代にも科学万能主義に警告を鳴らした人がいました。ラフカディオ・ハーンです。

晩年ハーンが友人に書いた手紙の中でそのことに触れています。この手紙の中で、人生に希望を抱かせてくれたものは「幽霊」だといっています。「幽霊」という言葉の中には、神・悪魔・天使もはっています。幽霊が人に勇氣と人生の目的を与えていたといっています。幽霊こそが万物を見えざる生命の感覚と活動で満たしていました。幽霊が人々を、目には見えない世界へ目を向けさせていたということです。幽霊こそが、恐怖と美を造りあげていたのです。それがいまや、幽霊は死に絶えてしまったと言っています。電気と蒸気と数字の世界(科学の世界)は虚しく、からっぽですと結んでいます。ハーンの死の前年に出版された『怪談』は、世界の国々が科学万能を目指した20世紀はじめに書かれた、変わり行く時代への彼の遺言だったという見方もなされています。鬼太郎の世界やハーンの世界を読み継いでいきたいものです。

## 2 ユング心理学の世界

### 1. 「無意識」という概念の発見者フロイト

無意識とは、私の中にあって私ではない部分のことです。「もう一人の私」といってもよいでしょう。無意識という概念の歴史は古くからありましたが、フロイトに「無意識の発見者」という肩書きがついているのは、フロイトが無意識の問題は非常に重要だという意識を広く社会に広めたからです。フロイトは、人が見る夢に無意識が現れると考えました。こうして、夢を研究したフロイトは、人間心理の無意識層に光をあて、心に関する理論を作りあげました。

彼の理論の柱は3つあります。

人間の精神過程の多くは無意識的である。

あらゆる人間の行動は、究極的に、いわゆる性欲によって動機づけられている。

性衝動に付随する強力な社会タブーのために、我々の願望や記憶は抑圧されている。

フロイトは精神を3つの心的領域に分割しました。「イド」と「自我」と「超自我」です。イドはリビドー（本能的衝動）の貯蔵所であり、あらゆる心的エネルギーの主要な源泉です。フロイトが「快楽原則」と呼ぶ根源的な生命の原則を充足させようとするのがイドです。イドは、意識や理性的秩序を欠落させていて、途方もない力を備え、無定形な活力を内に秘めています。イドは人間の攻撃的性格及び欲求全ての根源ともいえます。無法で反社会的で、道徳意識を欠落させています。その機能は、社会的慣習や法的倫理、あるいは道徳的規制などに無頓着に快楽本能を満足させることにあります。抑圧されることがないので、イドは我々にどんなことでもさせようとし、ひたすら本能的欲望の充足に向けられます。イドで表されるようなリビドーを、フロイト以前の人々も当然知っていましたが、それは外から来る力、つまり悪魔の仕業と考えていました。

イドはそうした危険なエネルギーを孕んでいるので、そうした機能を抑えて、個人と社会を守る心的機能が当然必要なわけで、その働きをするのが「自我」です。これは、心の中の理性的管理機関といえます。自我は本能的衝動を規制し、それが解放された場合でも、破壊的行動に走らせない働きをします。一言でいえば、イドは放縦な欲望であり、自我は理性と慎重さです。「超自我」は良心と自尊心の貯蔵所で、大部分がイドと同じ無意識内にあり、社会を守るのが主な働きです。超自我は自ら直接行動するにせよ、自我を介して間接的に行動するにせよ、イドの衝動を抑止し、規制して、社会が受け入れ難いとみなす快楽衝動を阻止して無意識層へ押し戻す働きをします。以上のことを更に別の言い方で言

えば、イドは快楽原則の支配を受け、自我は現実原則に支配され、超自我は道徳原則の支配を受けるといえます。イドは我々を悪魔に変貌させ、超自我は我々に天使の振る舞いを要求します。一方自我は、これら二つの対立する力の中に立ち、バランスを取りつつ、我々を健全な人間に保とうとする任務を帯びています。

## 2. ユングの普遍的(集会的)無意識

ユングはフロイトと違って、リビドーには性的なもの以上の意味が含まれていると考えましたし、無意識を個人的無意識と普遍的無意識という二つのレベルで考えました。個人的無意識は、個人の人生体験の中で抑圧されたものが溜まっている場所ですが、普遍的無意識には、過去からの全人類に共通する記憶が溜まっている場所と考えました。人間の体の器官には、魚の脳とか、爬虫類の脳といった、古い器官もあるように、心にも古い部分があり、それを普遍的無意識と呼んだのです。私達は、何かを言ったりしたりする時、自分の意志でそうしていると思うのですが、つまり、自分の意識で動いていると思っているのですが、実は無意識の方に重心があって、自分の知らない無意識の力が自分を動かしているということを考えたのがフロイトでありユングであるわけです。自分の意志とは違うもので操られているという考え方には、例えば神の摂理という観念があります。自分の意志で行動しているようだが実は神の意志で動いているという考え方です。深層心理学もそれに似ていて、神の代わりに無意識を想定しているわけです。動物にも、例えば、鶏の雛が、鷹の影に怯えて逃げ出す本能が遺伝的に伝わるように、人間にも、一段と複雑な精神的傾向(民族の記憶)が遺伝として継承されていると考えます。人間の心はロックが言ったよ

うに、タブラ・ラーサ(刻まれていない書き板)ではなく、肉体と同じように、精神も個々に先天的な行動様式を身につけていると考えます。ユングはこれを「元型」と呼びました。「元型」は遺伝的に伝えられた精神的行動様式であり、有史以前から人間の心の中に深くしみ込んでいて、永遠に生き続けます。元型は本能であり、人は知らず知らずのうちにこの元型に動かされて行動していくのです。元型は人の夢に現れますし、神話、民話、昔話、童話は、元型を意識世界に明瞭な形で提示したものであるため、そうしたものを読むことによっても、元型のもつ意味を知ることができます。ユングの主な元型6つを確認しておきます。

#### 影 (SHADOW)

人は誰でもあらゆる可能性をもって生まれてきますが、その人の素質や遺伝的要因、環境、様々な巡り合わせによって、その一部だけを発達させます。後に残された未発達の可能性は無意識の中に住んで、もう1つの人格を形成します。それが影です。影とは、その人の意識の中では生きられなかった部分、もう一人の自分のことです。人は自分の価値観に反することは抑圧します。例えば暴力とかごますりとか自己中心的な言動とかです。この影は、自我の制御がはずれたとき、例えば酒を飲んだときとか、とても疲れたときなどに現れます。これが極端になると、ジキル博士とハイド氏のような、正反対の性格をもつ二重人格になってしまいます。また、人間は自分の影を他人に投影することがあります。自我は、本来は自分の中にあるのだけれど、認めたくないものを、他人に投影する働きもっています。反道徳的な人を見て、あいつは反道徳的だ!と思うのは、本来自分がもっているものへの反応なのです。車の割り込み

に凄く腹を立てるのは、自分も割り込みたいのを抑えているのに、他人にやられると腹が立つわけです。投影は無意識的メカニズムなので、本人は投影に気づきません。集団全体が自分達の影を別の集団に投影することがあります。ナチス・ドイツがユダヤ人にしたことや戦前の日本の鬼畜米英という言葉やアメリカ人がネイティブ・アメリカンにしたこと等です。

鬼、妖怪、悪魔、化け物、怪獣といったものは、人間の影にイメージを与えたものであり、時代が変わり、科学が発達してもなくなることはないでしょう。ユング心理学の特徴は、影を否定せず、その人を形づくる心的エネルギーの一部と考え、これをうまく扱えば、心はもっと深く豊かで、創造的なものになると考える点です。影を意識の中に取り込み、統合し、新たな可能性を引き出していくのがユング心理学です。

#### ペルソナ (PERSONA)

ペルソナは、人が現実の社会に対して見せている顔であって、建前のようなものです。大勢の人の前では誰でも外向きの顔を作って、あまり自分が傷つかないように、その裏に隠れたり、自分を曝け出しすぎて恥ずかしい思いをしたりしないように、ある程度仮面をつけます。その仮面がペルソナです。PERSONAとはギリシャ語で仮面を意味し、この言葉からPERSON(人間)、PERSONALITY(人格)という言葉が生まれました。人間の本質を仮面ととらえているわけですから深いですね。ペルソナの危険性としては、あまり強いと仮面が脱げなくなり、家でも仮面をはずさないため、いろいろな弊害が出てくる可能性があります。それを防ぎ、ペルソナを高い次元で機能させるためには、自分の中のいやな部分、情けない部分、弱々しい部分、それ

らは全て自分なのだ」と認め、受け入れていくことだとユングは言っています。ユングはこれを個性化の過程と呼んでいます。個性化が達成されれば、ペルソナも高い次元で機能するようになります。

#### アニマ (ANIMA)

アニマは男性が無意識の中に秘めている未発達な女性原理で、情緒性やムード、恋愛感情等を司るものです。プラトンは、『饗宴』の中で、男女がなぜ求め合うのかを説明しています。人間はもともと男性性と女性性の両方を持ち、完全無欠でした。手・足4本ずつ、目も二組ありましたが、人間が傲慢になったため、神は2つに分けました。以来、男性と女性はもとの相方を求め合うのだというものです。このプラトンの話をもとに、人間の心の中には両性をもっていた頃の残骸が残っていて、それがアニマ(男性の中の女性性)であり、アニムス(女性の中の男性性)なのだと考えます。アニマは、創造力の源泉になるもので、多くの芸術家が永遠の女性像を探求するのは、このアニマに導かれてのことなのです。アニマは男性の心の中の女性像ですが、年とともに女性像も変わっていきます。最初は母親にアニマを投影させ、次に性的女性としての娼婦、恋愛対象としての女性、聖母マリアのようなイメージをもった女性、アテナ女神のような叡智的女性と、理想の女性像が変わっていきます。

#### アニムス (ANIMUS)

アニムスについては、ユングの妻のエンマが書いています。アニムスは女性の無意識に潜む未発達の男性原理で、知性や理念や決断を司ります。女性が求める男性像も年とともに変わっていきます。最初が力の段階で、父親に始まり、力の強い男性、スポーツ選手等

に理想の男性像を重ねます。次に行為の段階で、実行力のある人、成功した実業家がアニムス像になります。次が言葉の段階で、表現力のある人、筆がたったり、弁がたったり、知性と教養に溢れた男性に惹かれます。最後が意味の段階で、人生について深い知恵を持っている人が、女性の最終的に求める男性像になっていきます。

#### 太母 (GREAT MOTHER)

太母は女性の成長の究極的な目標ですが、太母にはプラス面とマイナス面があることを知ることが大切です。プラス面は太母の「育てる」面です。母親は無償の愛で子供を育てます。しかし、それが過ぎると、子供を「飲み込む」面がでてきます。過保護の母親は、その無償の愛が行き過ぎて、かえって子供の自立を妨げるのです。男性が一人前の大人に成長するには、現実の母親から独立するだけでなく、自分自身の心の中にあるこのイメージからの独立も図らねばなりません。昔話や御伽噺や神話に出てくる怪魚に呑まれる主題や怪獣退治の物語は、この太母との戦いと考えることができます。自我の象徴である英雄が、太母の象徴である怪獣と戦ってこれを退治し、新たなる自我の確立を図るお話しというようにユングは解釈します。

#### 老賢人 (OLD WISE MAN)

老賢人は、男性の成長の最終的到達点です。男性の理想像で、仙人のイメージを思い浮かべるとよくわかります。仙人はしばしば童子に姿を変えて現れることがあります。つまり、老賢人は永遠の少年でもあり、若さ、永遠の生命力、理性等を完全に持ち合わせ、人間のあらゆる可能性を自分のものとした完成した人間のイメージです。太母同様、老賢人にもプラス面とマイナス面があります。老賢人は、



人生の様々な問題に対する自覚を促し、完成された人間に導く一方で、老賢人のイメージによりかかりすぎて、依存的で、一人立ちを阻む面があります。人は、太母や老賢人のマイナス面に呑み込まれないように、プラス面を活かすように導くのがユング心理学です。

### 3. ユング心理学の目標

ユング心理学の究極目標は「個性化」と呼ばれるものです。我々の意識は、自我を中心として、ある程度の安定性を持ち、統合性を持っていますが、この安定した状態に自我は留まることなく、その安定性を崩してまで、より高次の統合性へと志向する傾向を人間の心は持っています。個人に内在する可能性を実現し、自我を高次の全体性へと志向させる努力の過程を「個性化」の過程、「自己実現」の過程と呼び、これが人生の究極目標だとユングは考えました。「個性化」を実現させる心の働きが「自己」で、自己は意識と無意識を統合したり、人間の心に内在する対立的要素、男性的なものと女性的なものとか、思考と感情等を統合します。意識の中心が自我で、意識と無意識を含めた心全体の中心が自己です。自己も元型の1つで、アニマやアニムス同様マイナス面もあります。その偉大さの中に自我が呑みこまれてしまったり、外界との関係を忘れてしまったりすることがあります。自己との対決には強い自我を持つことが大切であるとユングも言っています。自己が人格化されると超人的姿をとることがあります。男性にとっては老賢人や童子、女性においては至高の女神の姿で、夢や神話や昔話や童話に出てきます。我々の自我が問題に直面し、あらゆる意識的努力を傾けても解決できず、絶望に陥りそうな時に、自己の働きが起こり、今までの段階とは異なった高次の解決を得ることを経験することがあります。個性化で必

要なのは、本当の自分を知ることです。気のつかなかった自分、見ないでいたいやな自分、嫌いな自分、劣等な機能等、を意識化することです。それらを自分の中で統合していくのが「個性化」です。「曼荼羅」はそのことを表現したシンボルだといわれています。無意識を知ることは自己理解を深め、人生を豊かにしてくれます。ユングは人生を心の成長過程と考えています。「個性化」とは、普遍的無意識の中にある元型と対決し、心の全体性を獲得し、到達目標、悟りへ至る過程といってもよいでしょうし、自己実現の過程といってもよいでしょう。

### 3 ゲゲゲの鬼太郎とユング心理学

#### 1. ゲゲゲの鬼太郎は心のドラマ

昭和30年代から妖怪漫画が少年達に受けたのは、ちょうど経済成長に向かう時であり、そのひずみが人間の内的精神生活に生じつつある時期でした。以後現在まで、妖怪漫画は衰えを知らず人気があります。子供達は、小さい頃から産業戦士になるため、勉強に追いまわられています。だから心もすさみ、いじめが起きたりもしています。その一方で、子供達は心の飢えを癒すため、妖怪漫画を読み、妖怪アニメを見て心の落ち着きを取り戻しています。妖怪には子供達の夢とロマンが託されているわけです。子供達だけでなく、大人達にとっても同じことがいえます。高度に合理化され、規格化された時代に生きていながら、毎日の生活の裏側には、不安と絶望が隣り合わせになっています。そうした時に人々が求めるものは、不安を解消し、再生する手立てです。その1つが、妖怪の世界のような、不思議な世界に浸ることなのだと思います。妖怪漫画には、子供達の夢とロマンと大人達の再生が託されているといえます。

『ゲゲゲの鬼太郎』をこうした視点で読むだけでも充分なのですが、私はここで、別の視点で読んでみることを思いつきました。それが鬼太郎をユング心理学の視点で読むということです。つまり、鬼太郎を妖怪(幽霊族)としてではなく、一人の少年の心のドラマとしてみようということです。鬼太郎は最初から正義の味方ではなく、タバコも吸えば人も殺す怪しい少年でしたが、紙芝居時代、貸本漫画時代、少年週刊誌時代と長期に亘って描かれ続けていくうちに成長し、最後にはもっぱら正義の味方に徹した、現在私達が知っている鬼太郎に進化していったのです。ユング流に言えば、「個性化」を達成した姿が今の鬼太郎だということができます。鬼太郎少年は「個性化」を達成し、老賢人の域にまで達しています。老賢人は「個性化」が達成された心の象徴ですが、時として少年の姿で現れることは前に触れました。老人の知恵を持った子供ということですが、これは自己実現の過程として現在も進行中である面が強調されているのだと思います。鬼太郎が座敷ワラシに似た少年の姿で描かれるのは、そのことを暗示していると思います。こうして鬼太郎は、人を愛し、自然を大切に、悪い妖怪や人間を懲らしめる正義の味方といういい意味でのペルソナを身につけて(ちゃんちゃんこは鬼太郎のペルソナとしての制服)、ゆるぎない博愛主義の生活を送っていますが、無意識はなくなりませんから、何かの拍子に無意識が現れて、それと戦い、勝利して正義の味方をキープしていると思われます。鬼太郎に現れる無意識はなんのでしょうか。それは主に鬼太郎の「影」だと思います。鬼太郎が初期に持っていた悪への傾向という影だと思います。

## 2. ぬらりひょんが鬼太郎の影

鬼太郎が無意識の中に封印してある悪への傾向にぬらりひょんという形を与えて、心の中でそれと闘っているのが、鬼太郎の作品中に多く現れる「鬼太郎対ぬらりひょんの闘い」の意味なのではないでしょうか。ぬらりひょんは、悪い妖怪の総大将で、彼の執念は鬼太郎を倒すことです。このことは、鬼太郎の影の大きさを示していると思われます。「影」が「老賢人」にとって代わろうとしているのだと思われます。『妖怪なんでも百科』にぬらりひょんの特徴が書いてあります。妖怪の中で一番頭がよく、ぬらり脳と呼ばれる50キロ以上の重さの脳を持ち、あらゆる知識がぎっしり詰まっています。体内にはぬらりひょん石という石を持っています。これは妖怪のボスの印で、無限のエネルギーがあります。彼の目はひょん目と呼ばれ、この目に見つめられると、嘘がつけなくなって、本当のことをしゃべってしまいます。体の中には強力な妖気も持っています。

2007年に始まった新しいアニメ版『ゲゲゲの鬼太郎』では、「宿敵ぬらりひょん」というタイトルで、ぬらりひょんとの対決が描かれています。ぬらりひょんは宿敵鬼太郎について、手下蛇骨婆と朱の盆を前にして演説をぶちます。長年に亘り、私の邪魔ばかりしてきたにつつき鬼太郎。何度その命を狙ったことか。だがやつは死ななかつた。その理由は3つある。幽霊族の末裔で、やっかいなのが祖先の霊毛で編まれたチャンチャンコが力を貸していること。肉体自体に強い生命力があり、髪の手も、体内電気等数々の能力があること。仲間の妖怪や人間達との心のつながりがあるから、これがやつに能力以上の力を発揮させること。しかし、この全ての長所をふさげば、そこが弱点になる。鬼太郎は終わりだ！妖怪の世界、人間の世界で全て

を手に入れた私が、1つだけやりのこしたこと。それは鬼太郎の抹殺だ！こんどこそ終わりにしてみせる！といって、今度仕掛けた罠が百々目鬼（どどめき）を使った誘い出し作戦です。この闘いは最終的には鬼太郎の勝利に終わりますが、鬼太郎作品にみられる数々のぬらりひょんとの闘いは、鬼太郎の影との闘いを大きなテーマとしているからだと思います。

私が、鬼太郎とぬらりひょんとの対決を鬼太郎少年の心のドラマだと思ったきっかけは、完全復刻版の第4巻を読んだときです。ここでぬらりひょんは、鬼太郎によって古代の石臼を使って先祖流しにされ、マンモスの時代に捨ててこられたはずなのに、どういっわけかまた戻ってきて、鬼太郎をつけ狙って何度も悪さをしかけてくるところです。これを、心の中のできごとと考えれば納得いきます。意識にのぼってきた影という無意識を、再び無意識に閉じ込めたが、また意識にのぼってきたと考えれば、閉じ込めても何度も現れる鬼太郎の影であるぬらりひょんの説明がつかます。宿敵ぬらりひょんの宿敵とは、自分の中の影という無意識であり、闘っている相手は影というもう一人の自分なのだと思います。

人間にとってもう一人の自分である影との闘いは、大きなテーマであり、闘い方にはいろいろあるでしょうが、「坐禅」もその1つだと知りました。「禅」とは、心を安定させ、統一させることによって、宗教的叡智に達しようとする修得法ですが、「坐」という字は、土の上に人が二人いて、対話している様を表現しているのだといいます。つまり、人が、もう一人の自分と対話している形だということです。他にも、もう一人の自分である影と闘う方法はいろいろあるのですが、鬼太郎の悪との対決と勝利を見てほっとするのは、

私達の中にある「影との闘いに勝つ憧れ」が満足させられ、希望につながっていくからではないでしょうか。ユングの元型のところでも触れましたが、ユング心理学の特徴は、影を否定せず、その人を形作る心的エネルギーの一部と考え、うまく扱うことによって、心をもっと深く、豊かで、創造的なものにしていくことができると考える点です。鬼太郎が影を意識の中に取り込み、統合し、新たなる可能性を引き出していくのを見て、私達は感動し、感銘を受けるのだと思います。

#### 4. 目玉のおやじは「自己」

鬼太郎が老賢人を維持し、更に進化を続けている要因のひとつに、ぬらりひょんもあげているように、仲間の妖怪や人間達との心のつながりがあります。その中で、目玉のおやじは、ユング心理学でいうところの「自己」を象徴していると思います。鬼太郎の両親は、人類によって滅亡に追いやられた幽霊族の最後の生き残りでしたが、両親とも不治の病で死んでしまいます。母のおなかには鬼太郎が宿っていて、埋葬された母から誕生し、墓場から這い出てきました。その時、死んだはずの父の肉体から目玉が落ち、父は目玉だけとなって鬼太郎を見守っていきます。この、目玉だけになっても我が子を見守る執念は、鬼太郎作品を読んだり見たりしているとよくわかります。自分の命をかけても鬼太郎を守ろうとする姿勢、鬼太郎に正義感を吹き込む使命感、これらはまさに心の中で自己が果たす役割です。自己は自我と無意識を統合し、人を個性化に向かわせます。この目玉のおやじという自己が常にそばにすることで、鬼太郎は老賢人の域にまで達したのだと思います。

#### 5. ネズミ男はトリックスター

目玉のおやじについて、鬼太郎に老賢人を

維持させ、更に進化させている要因はネズミ男だと思えます。ネズミ男は金に汚く、平気で鬼太郎や仲間達を裏切りますが、その裏切りが引き起こした問題を解決するために、鬼太郎と仲間達は知恵を絞り、技を総動員させて戦います。その結果、鬼太郎の正義感は益々冴え渡っていき、鬼太郎の正義感は維持され、進化していついともとれます。トリックスターとは、本人にはそんな意図は毛頭ないけれど、相手を裏切り、何らかの問題の解決を計り、よい方向に向けていく役割をする心の働きのことです。ネズミ男はまさしくその役割を果たし、ストーリー展開を面白くしています。

トリックスターはいろいろなところでできます。「創世記」にでてくる蛇もトリックスターといえます。蛇に唆されて知恵の実を食べたために、楽園から追放され、それ以降、人間に死と労働が生じます。子孫はそれを解決するために、知恵を絞って格闘していく人間ドラマが展開していくようになったわけです。蛇がいなかったら、何の進歩もない、怠惰な日々が続いていただけです。ギリシャ神話のプロメテウスも、火を盗むことによって、人間に文化をもたらしたのでトリックスターといえますし、アンデルセンの「裸の王様」に出てくる二人の詐欺師も、王様を騙すことで王様の仮面をはいだわけですからトリックスターといえます。トリックスターとは、自分の無意識に潜む膠着した世界を打ち壊し、新しい価値観の発展を促す心の働きのことです。私達は人生の中でよく失敗しますが、この失敗も無意識が呼び起こしているものなのです。私達は無意識に失敗して、人生を振り返る機会を作っているのです。こうしたことも、トリックスターの働きといえます。失敗は、新しい自分を作るためにトリックスターという無意識によってもたらされたものなの

だとわかれば、失敗に対して前向きになれます。

ネズミ男はトリックスターだとわかりましたが、砂賭け婆、子泣き爺、一反木綿、ぬりかべ、等、鬼太郎の仲間達は、心のどんな働きなのでしょう。それは、善きもの、美しきものを愛する心の働きだと思えます。鬼太郎が影と対峙し、闘うとき、負けそうになっても、これらの心の働きがともに作動して、影の封じ込めに成功しているのだと思えます。

## 6. 鬼太郎のアニメ

最後に、鬼太郎のアニメを見ておきましょう。鬼太郎は、死んだ母の胎内から自力で抜け出したということは前にも触れました。ということは、鬼太郎には母はいないわけで、鬼太郎には太母を巡っての葛藤はありませんが、母を思う気持ちは強く残っていて、「鬼太郎地獄編」では、地獄の母と会っています。鬼太郎の母は岩子といい、『四谷怪談』のお岩さんと血縁関係にあるものの、人間でした。幽霊族とは知らずに鬼太郎の父と結ばれましたが、人間と幽霊族との結婚は厳禁との古代からの掟を犯したため、地獄に落とされて、虫の番をさせられています。このように、鬼太郎の心の奥には母を思う気持ちが強く残っていて、それが反映されて女性に弱いところがあります。鬼太郎は350歳ということですが、見た目は少年なので、見た目通り、アニメも母親的な感情にひかれたり、ほのかな恋心を持つ程度です。鬼太郎の初恋の相手は貸本漫画版や『鬼太郎夜話』に登場する寝子で、この恋は寝子の自殺で悲恋に終わります。高校生になった鬼太郎（『続ゲゲの鬼太郎』シリーズ）にはユリ子という美人の恋人ができましたが、ユリ子は芸能界に入り、鬼太郎は振られてしまいます。次は、女子大生になっ

た猫娘が鬼太郎に迫り、一つ屋根の下で暮らすようになりませんが、ネズミ男の妬みで、猫娘は悪魔にされてしまいます。『その後のゲゲゲの鬼太郎』では、南洋の島の酋長の娘メリーに一目惚れした鬼太郎は告白し、できなかった婚のような形で結婚してしまいます。

終わりに

ゲゲゲの鬼太郎をユング心理学の視点で読んでみようと思ったのは、河合隼雄氏の『ユング心理学入門』を読んでいたときでした。残念ながら河合氏は昨年亡くなられましたが、梅原猛氏の文化勲章受賞記念パーティで言葉を交わすことができ、ツーショットの記念写真を撮らせて頂いたことが思い出されます。河合氏には多くの著作がありますが、中でも『河合隼雄著作集』全十四巻は、人間の心と生き方に関する必読書だと思えますので、これからは、これらを中心に河合氏の著作を読んでいくことが楽しみです。と同時に鬼太郎作品をはじめ、水木しげる氏の著作もできる限り読み続けていきたいと思っています。

#### 参考文献

- 1) 「水木しげる記念館 公式ガイドブック」, 朝日新聞社, 2003.
- 2) 「大妖怪展」, 朝日新聞社, 2000.
- 3) 映画「ゲゲゲの鬼太郎」図録, 2007.
- 4) 水木しげる『ゲゲゲの鬼太郎』完全復刻版全九巻, 講談社, 1996.
- 5) 水木しげる『妖怪なんでも百科』, 講談社, 1995.
- 7) 宏實『暮らしの中の妖怪たち』, 河出書房, 1990.
- 8) 小此木啓吾『フロイト』, NHK ブックス, 1973.
- 9) 山根はるみ『ユング心理学入門』, ごま書房, 1994.
- 10) 大槻憲二編『精神分析学辞典』, 育文社, 1961.
- 11) 河合隼雄『無意識の構造』, 中公新書, 1977.
- 12) 河合隼雄『ユング心理学入門』, 岩波書店, 1994.
- 13) 鈴木晶『無意識の世界』, 上・下, 日本放送協会, 1997.
- 14) 河合隼雄『河合隼雄著作集』全十四巻, 岩波書店, 1994.